



Data

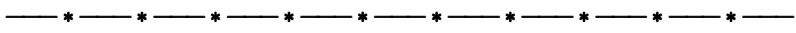
監督・脚本：エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ

出演：フランソワ・クリュゼ／オマール・シー／アンヌ・ル・ニノ／オドレイ・フルーロ／クロティルド・モレ／アルバ・ガイヤ・クラゲード・ペルージノ／トマ・ソリヴェレス／シリル・マンディ／ドロテ・プリエール

👁️👁️ みどころ

首から下が麻痺した大富豪と、スラム育ちの黒人青年が「最強のふたり」になったのはなぜ？そのキーワードは、同情していないこと。そこが良かったらしいが、ストーリーの展開につれてその意味が少しずつ明らかに・・・。

フランスで3人に1人は観たという驚異の大ヒットはなぜ？『アーティスト』（11年）を押しつけてオマール・シーがセザール賞の主演男優賞を受賞したのはなぜ？悪貨が良貨を駆逐するのではなく、「本音」が「建前」を駆逐していく人生ドラマとそこから生まれる「爽快感」を、是非本作で！



■フランスでは、3人に1人が！■

日本では1958年に映画人口11億2700万人というピークを迎えた。これは赤ちゃんを含むすべての日本人が、1年間に映画を10本観ていることを意味するからすごい。この頃の日本では年間約500本の映画が製作され、映画館は1960年には7663館という戦後最高を記録した。ところが今は・・・？

韓国の観客動員数ベスト3は、①『グエムル 漢江の怪物』（06年）（1301.9万人）②『王の男』（05年）（1230.2万人）③『ブラザーフッド』（04年）（1174.6万人）でいずれも1000万人を突破しているから、韓国人の5人に1人は観たことになる。また、中国映画では現在『弾丸を飛ばせ（譲子弾飛）』（10年）が大ヒットしているが、フランスでは？

2012年の第84回アカデミー賞ではフランス初の無声映画『アーティスト』（11年）（『シネマルーム28』10頁参照）が席卷したが、本場のフランスで『アーティスト』を押しつけてセザール賞の主演男優賞を受賞したのは、本作のオマール・シー。また、本作

はフランスで公開後10週連続興行収入第1位を続けた他、フランス人の3人に1人が観たという大ヒットになった。本作は実話にもとづいた作品らしいが、製作費は約10億円くらいだから、ハリウッドの100億円単位の超大作とは大違い。また、主人公も車椅子に乗った中年男フィリップ（フランソワ・クリュゼ）とスラムに住む黒人男ドリス（オマール・シー）の2人で、絶世の美女が登場するわけでもない。そんな映画を、なぜフランスでは3人に1人が！

■□■なぜこの男が いいの？それは、同情しないから！■□■

ドリスが車椅子生活を送るフィリップの介護者の面接に赴いたのは、不採用の通知を3枚もらえば失業手当が支給されるという、いかにもフランスらしい制度(?)を「活用」するため。これは、私が1971年の大学卒業時に民間企業に就職する気などサラサラないのに東京への旅費をもらうため、東京にある某企業の面接試験を受けたのと同じようなもの。もともと受かる気がないから面接態度も横着なもので、私は当然落ちたが、なぜかドリスが約束した翌朝9時にフィリップ宅に赴くと、採用と告げられ、メチャ豪華な個室を与えられたからビックリ。しかして、なぜフィリップはドリスのようなスラム街に住む陽気だが礼儀知らずで、趣味も当然違うケッタいな男をあえて採用したの？

その理由はしばらくの間わからなかったが、「ドリスは宝石強盗で半年間服役した前科者だから気をつけるよう」親戚の人からアドバイスされた時のフィリップの答えを見れば、フィリップの判断プロセスがよくわかる。それは、「彼は私に同情していない。そこがいい。彼の素性や過去など、今の私にはどうでもいい事だ」ということだが、なるほど、なるほど。昨今の日本では新聞、テレビのニュースでもちょっとまともそうな報道番組でも、「原発事故の被害者は救済されるべきだ」「生活保護者に生活保護費は支給されるべきだ」等々の建前論ばかりがまかり通り、本音の議論がほとんど聞けない中、私はフィリップのこのセリフを聞いて心の中で拍手喝采！やっぱり人を判断する時は、また政策を決定する時はこうでなくちゃ。

■□■冒頭のシーンは、乱暴かつ非教育的だが・・・■□■

カーアクションを売りモノにする映画は多いが本作はそうではなく、全く立場が異なる2人の男が「最強のふたり」になっていく熱い人間ドラマ。そんな風に思っていたから、冒頭に飛び出す凄まじいカーアクションに、まずはビックリ。

車椅子のまま助手席に座るフィリップと、車のハンドルを握るドリス。映画は冒頭そんな2人をさまざまな角度からアップで捉えるが、渋滞でイライラしてきたのか突如ドリスは車のパワーをアップさせ、ムチャクチャな車線変更をしながら猛スピードで突っ走り始めた。そんな無茶苦茶男ドリスを良識派のフィリップがたしなめるのかと思いきや、フィリップも一緒にハードな音楽でリズムをとり始めたから、これにはビックリ。さらにパトカーが追いかけてくると、そこでドリスがフィリップに持ち掛けたのは、「パトカーをまく

方に〇〇」というバクチ。フィリップがそれに乗ったと見るや、ドリスは見事な運転（暴走）テクニック（？）を披露してパトカーを振り切ったと思った途端、前方を別のパトカーで塞がれたから、これにて万事休す。ところが、そこでさらにドリスは「パトカーの先導付きで行く方に〇〇」と更なる賭けを……。スラム育ちのドリスを介護者として雇っている間に、フィリップはどんどんその悪の影響を？「おふざけ」もここまでくると許容限度を超えているのでは？との声も聞こえてきそうだが、さて……。

その後の展開はあなた自身の目で観てもらいたいが、車の暴走事故が相次いでいる昨今、そもそもこんな暴走運転は絶対容認されないはず。さらにフィリップが身障者であることを利用したドリスのやり口はいかかなもの？誰でもそう思うはずだが、さて本作では……？また、こんなプロローグで始まった本作の次なる展開は？



© 2011 SPLENDIDO / GAUMONT / TF1 FILMS PRODUCTION / TEN FILMS / CHACORP

■□■絶好調の2人だが・・・■□■

フィリップがドリスを採用したことには、長年フィリップの助手をしているベテラン女性イヴォンヌ（アンヌ・ル・ニ）も美人秘書のマガリー（オドレイ・フルーロ）も心配したはず。とりわけ、ドリスから「一緒に風呂に入ろう」などと口説かれるマガリーは嫌な思いをしたはず（？）だが、何でもユーモアに変えてしまうことができるフランス人ならではの切り返しが面白い。もともとフィリップは傲慢で頑固者だから、四六時中その介護を要求される人間は大変で、前任の介護者はみんな1週間も持たなかったらしい。ところが、ドリスはそんなフィリップをご主人様として見るのではなく、対等の視線で対応した

から、それがフィリップにはかえって心地よかつたらしい。スラム育ちらしく、口から出る言葉は下ネタやブラックユーモアばかりだが、ところどころで意外な優しさや思いやりも・・・。

本作が大ヒットした理由は、「女に関してだけど、アッチ方面はどうしているの？」とズバリ迫っていくタッチの良さ。こんなことは、並みのお行儀をわきまえている男ならなかなか言えないが、スラム育ちのドリスならへっちゃら・・・？その結果、首から下が麻痺しているフィリップが「アッチ方面」をどのように処理しているのかについても本作は、堂々と見せてくれることになるから、そこにも注目！本作中盤は、そんな絶好調の2人の様子を、違法と合法すれすれ、ユーモアたっぷり、そして心地よいスピード感でみせてくれるが・・・。

■□■文通だけでOK？それとも・・・？■□■

フィリップ家では介護者の仕事は身体を洗ったり、マッサージをしたりという作業がメインで、手紙の管理など知的仕事は助手のイヴォンヌや秘書のマガリーがやっているらしい。しかし、はっきりその線引きをするのは難しいから、ある日ドリスが知ったのは、フィリップがエレノアという女性と文通していること。即物主義者(?)のドリスは、そもそも「文通」の意味すらわからなかったようだから、「半年も顔も見ないで、手紙だけのやり取りをするなんて時間の無駄」としか考えられなかったのは当然。しかして、フィリップの意向を無視して勝手にエレノアと電話したり、写真を送ることを約束させたり、挙げ句の果てには、デートの日取りを決定させたりとおせっかい三昧。

ここまでくると、「ご主人様VS介護者」という立場は全くなく、友人同士という感覚だが、いざとなると決断が鈍るのが、いろいろ考えるタイプの人間だ。ドリスは何でも思いついたことをそのまま行動に移すだけだが、そんな性格と正反対のフィリップは結局、身障者であることがバレる写真をやめて、事故前の写真に切り替えたり、デートの場から逃げ出したり・・・。やっぱりフィリップにとっては、文通だけで想像力を巡らせる恋愛(?)の方が落ち着きがいいの？そうかもしれないが、それでは何の発展可能性も見えないのでは・・・？

■□■実はドリスにも深刻な悩みが・・・■□■

日本の「絶好調男」と言えば、昔は植木等。今は横浜DeNAの監督に就任した中畑清や俳優の高田純次だが、スクリーン上で言いたい放題やりたい放題の姿を見せつけるドリスは、まさにフランスの「絶好調男」。ところが本作中盤からは、そんなドリスも複雑な家庭の悩みを抱えていることが明らかになってくる。母親だと思っていた女性が実はおぼさんだったり、出来の悪い息子だと思っていた子供が義理の(?)弟だったり、ある時、ドリスがフィリップに打ち明けた家庭の事情はかなりややこしい。エレノアとの「デート事件」ですっかり気が落ち込んでいたフィリップは、ドリスを連れて専用ジェット機でのパラグライダー旅行とシャレ込んだことによって再度元気になったが、今度はドリスの方にトラブルが発生。それは、ヘマをして仲間にシメられた弟がドリスの元に逃げ込んで来た

ことだ。

今やフィリップにとってドリスは介護者としてなくてはならない存在だが、ドリスの家族のことを考えると屋敷の中にずっと留め置くわけにはいかないのでは？そう考えたフィリップはドリスに対して、「やめにしよう。これは君の一生の仕事じゃない」と提案。名残惜しむイヴォンスやマガリーとも陽気に別れを告げながら、翌朝ドリスは家族の元へ帰っていった。そして、フィリップは新たな介護者を雇い、ドリスは運転手の仕事を見つけ、それぞれ次の人生をスタートさせたかに見えたが・・・。

■□■再びあのシーンが。なるほど、なるほど・・・■□■

出会いがあれば、別れがあり、別れがあれば、次の出会いがある。人生とはそういうものだが、実は人生が上昇気流にある時はともかく、下り坂にある時は次の出会いが前の出会いを超えるのは難しいもの。ドリスは前科持ちではあるがまだ若く仲間も多いから、次の仕事を見つけ人生の再スタートを切ることができたようだが、フィリップは？スクリーン上では、最初に観た面接シーンから真面目そうな新人介護者の採用シーンが再度展開していくが、さてフィリップの満足度は？口は悪いし行儀も悪いが、ユーモアに富み意外性だらけだったドリスに比べれば、次のどんな介護者も・・・？

本作の「動の演技」でオマール・シーはセザール賞主演男優賞を受賞したが、第24回東京国際映画祭では、「静の演技」が光るフランソワ・クリュゼも、オマール・シーと並んで主演男優賞を受賞した。車椅子に座っているだけでフィリップの感情を表現するのは難しいはずだが、本作中盤ではいかにも楽しそうなフィリップの表情が印象深い。ドリスによって次々とカルチャーショックを受け、ある時は反発し、ある時は戸惑いながらもフィリップの人格は大きな変化を遂げていったわけだ。ところがドリスがいなくなり、新介護者の下での生活がスタートすると、フィリップの表情は・・・？そんな中、スクリーンには再び冒頭のあのカーチェイスのシーンが登場するから、それに注目。

フランスで大ヒットし第24回東京国際映画祭でも最高賞である東京サクラグランプリを受賞した本作のラストは、何ともおしゃれ。人間関係が次第に希薄になり、本音を語る機会が少なくなっている昨今、こんな映画を参考に互いに本音をぶつけ合い、「最強のふたり」になれる人間関係を築いていきたいものだ。もっとも弁護士の私としては、本音を出し合うことによって決裂し、ケンカ別れとなるリスクも覚悟しておく必要があることを付け加えておこう。

2012（平成24）年6月16日記